国際文化交流学部 岡村徹先生 推薦図書　パート１

タイトル；　『戦争とハンセン病』

著者；　藤野　豊

　著者は資料調査だけでなく、多くのハンセン病回復者および関係者にききとりを続け、本書を完成させている。その膨大なエネルギーと謙虚さには同じ研究者として学ぶべき点が多い。本書は、「戦争と隔離」、「戦時下のハンセン病患者」、「植民地・占領地のハンセン病患者」の三つの観点から、患者らの人権について考察している。日本が行った隔離政策のもつ規則性、日本の植民地や占領地で行われた隔離政策との関連性、さらには世界全体における隔離政策の中での日本の隔離政策の体系性（位置づけ）を、日本近現代史の中で解明しようとしている。著者が述べているように、日本と植民地・占領地を一貫した絶対隔離政策が当時の大東亜共栄圏に存在したのか、その全体像の解明が求められているが、研究は始まったばかりと言えるかもしれない。

　私は、本書を読む前に自身の言語研究のため、南太平洋にあるナウル島を複数回訪れることがあった。そのときに、第二次世界大戦下のナウル島で、39名のハンセン病患者が旧日本海軍によって海上で虐殺された歴史的事実を公文書等で知った。犠牲になったナウル島民は、10 代が９名、30 代が５名、40

代が８名、50 代と 60 台がそれぞれ２名ずつであった。事件の関係者は皆口をそろえて、当時は上官の命令は絶対だったので背くことが出来なかったと述べている。旧日本兵の衛生状態を保つために、当時の日本海軍第 67 警備隊の副隊長が部下に指示し、患者を殺害したことをラバウル戦犯裁判資料で確認できる。副隊長は、別件（欧州人殺害事件）で逮捕され 1946 年８月 10 日にラバウルで刑死したが、豪州軍は当該事件の背景を十分調査せず、刑を執行したが、あまりにも拙速だったのではないか。

日本でも、約 90 年間に及ぶ国の隔離政策を報じてきたマスコミ、元患者に対して断種や堕胎手術を行った医療関係者、患者は療養所で療養することが本人にとっても良い選択であるとし、隔離を助長したとされる宗教関係者、冤罪の可能性があった元患者を十分審議もせず死刑に処したとされる法曹界、患者を親に持つ児童の小学校への通学を拒否した龍田療（熊本市）の問題など、反省と教訓にすべき対象は、枚挙にいとまがない。

藤野氏は、戦時下の南洋群島や朝鮮や台湾やミクロネシアにおける調査を行い、日本のハンセン病問題の解決に繋げようとする。本書は、私たち一人ひとりにこうした問題を投げかけている。本書がきっかけで、少しでも多くの方がこれらの人権問題について考え、一緒に議論できれば有難い。

国際文化交流学部 岡村徹先生 推薦図書　パート２

タイトル；　『ユートピアの崩壊：ナウル共和国』

著者；　リュック・フォリエ著、林 昌宏訳

本書の目次を見ると、「リン鉱石の発見」、「島の黄金時代」、「犯罪支援国家」、「難民収容島」、「国家の破綻」、「肥満と糖尿病」などの言葉が並ぶ。これらの言葉を見るだけで、本書のおおよその内容がわかる。

赤道直下にある小さな島国だが、英国や豪州やNZや日本などが、興味を示した物がある。それはリン鉱石である。ナウルのリン鉱石は純度が高く、農業用の化学肥料として重宝された。そのおかげで、教育費や住宅費や医療費等が無料の国となった。しかし、国民自身の計画性のない浪費と甘い話をもちかけてくる世界の輩のせいで、ナウルはついに海外からの援助がなければ自立できない国家となってしまった。国家が破綻する過程は、本書がわかりやすく、説明している。

私がおもしろいと思ったのは、第VIIIの「援助パートナーの思惑」の箇所である。そこには、「八〇年代初頭以来、台湾はナウルの重要なパートナーであった。ナウルは台湾政府と同盟関係を結び、この強固な二国間関係は永続するかと思われた。ところが、二〇〇二年七月にナウルは台湾の宿敵である中国と接触した。レネ・ハリス（当時の大統領）は軽率にも一夜にして寝返ったのである」（141

頁）と書かれてある。つまり、ナウルは台湾と中国を天秤にかけ、より多くの経済的援助を引き出そうとしたのである。こういうことがナウルの歴史上、何度か繰り返されてきたのである。ナウルは、とても“したたかな”国なのである。実は、オセアニアの島嶼国・地域には、上記のナウルのような“したたかさ”を持ち合わせている国・地域が他にもある。例えば、米国や豪州が何も援助してくれないのなら、中国に援助をお願いする、といった具合に。これこそ、まさに、二つの大国を天秤にかけている実例である。小国が生きていく知恵がそこにあるのかもしれない。

　リン鉱資源を発見したのは英国のジョン・ファーンという人物である。それからすぐに、ナウルにリン鉱石公社を作り、その翌年から中国人や太平洋諸島民らを労働力として採掘に従事させた。この間、英国や豪州や NZ は大儲けしたが、それがナウルに十分還元されていないとして、ナウルは国際司法裁判所に訴え、和解金を得ている。その後、ナウルは租税回避地として利益を得る機会があったが、パスポートの密売も大きな利益になったようである。現在では、中東からの難民の受け入れで、年間 20 億円を豪州から得ている。さらにリン鉱石の二次採掘なども試みており、ナウル人は何も考えていないわけではないのである。国家がピンチになれば、その都度幸運な出来事がナウルに起きる。小国が生き残るための術を、文化的遺伝子として受け継いでいるのかもしれないと思った。

国際文化交流学部 岡村徹先生 推薦図書　パート３

タイトル；　『世界でいちばん石器時代に近い国：パプアニューギニア』

著者；　山口 由美

　まず本書は、タイトルからして魅力的である。人の心をくすぐる何かがある。「800 以上ある言語」、「選挙の投票率が高い」、「タブーや謎の多い秘密結社」、「黒魔術が今でも生きている」、「携帯電話の最大の課題が充電できないこと」、「世界でいちばん人気のない世界遺産」等、どこかコミカルな印象を受けるが、それよりもパプアニューギニアの多様性を肌で感じられるのが、本書の最大の魅力ではないだろうか。

　また本書を通じて、ニューギニアが鉱物資源や海産資源、さらには森林資源が豊富であることがわかるが、それを国の成長に活かしきれていない実態があることも知ることができる。本書にある「箱買いするほどおいしいコーヒーができるまで」に目を通していると、今すぐにコーヒーが飲みたくなるから不思議である。「ビルムと女たちの深い関係」では、「女たちが編んだビルムを使うことで、男たちも家族の絆を確認する」（129 頁）とあり、心が洗われるような思いを持つことができる。

私が一番おもしろいと思ったのは、ニューギニアの小動物の紹介のある箇所である。獰猛なワニやクスクス、木登りカンガルー、ワラビーなどの有袋類、国の象徴としての極楽鳥や飛べない鳥カソワリの紹介がある。以前、小沢俊夫編/小川超訳の『世界の民話：パプアニューギニア』（ぎょうせい、昭和 53 年）という本を読んだことがあった。その中に、亀が人間に変身、その人間がココヤシの木に変身、そのココヤシの木が星に変身する民話が残っている。とても楽しく、軽快な印象を読者に与える。こうしたことから、人間は単独では存在できず、動物や自然とは連続していることを思い知らされる。自然との融合、大地との一体化を表していると言えようか。

山口氏が取り上げた小動物たちは、多様な、あるいは雑多な文化を有する、パプアニューギニアという国を構成する一員であることは間違いない。山口氏も、「祖先はカマキリ？」のところで述べているが、各部族が祖先としてあがめるシンボル的存在をトーテムという。この場合、動物がトーテムにされることが多く、しばしばその部族にとってトーテムを食べるのは禁忌とされている。たしかな根拠があるわけではないが、トーテミズムという思想は、食糧資源を保護するためと主張する研究者もいる。豪州や米国の先住民の世界にも見られる。これが正に当該社会に「調和」を生むということではないだろうか。3 万年の伝統を可能にしてきた、パプアニューギニア人の知恵なのかもしれない。

国際文化交流学部 岡村徹先生 推薦図書　パート４

タイトル；　*Native Son*

著者；　Richard Wright

　随分前のことになるが、私は R. Wright の作品 *Native Son* という本を読んだことがある。黒人の主人公ビガーが裕福な白人家庭に運転手として雇われ、ある日の晩、その家族の娘を偶発的に殺してしまい、その後ビガーが逃亡するという内容である。これは単なる殺人事件ではなく、アメリカが抱えている社会問題を鋭く抉った作品である。

　作品の冒頭で、黒人の主人公ビガーが台所でねずみを片隅に追い詰めるシーンがある。これはアメリカという国が黒人を社会の片隅に追いやる行為とパラレルで描かれている。そして、殺人を犯したビガーが逃走をはかるものの、最後は白人の警察官に追い詰められ、鉄塔に上ったビガーにホースの水を浴びせ、ついに彼は力尽き、落下する。そのとき倒れたままのビガーは、白人警察官に囲まれ、上から覗かれる。これも冒頭で述べた、ビガーに追い詰められたねずみとパラレルに描かれている。

　ライトは本作品中で、さまざまな色彩語を駆使し、ある時はそれを使って恐怖を増長し、またある時は、それを使って不安な気持ちを表わしている。それは決

して、偶然ではないだろう。例えば白色は、「白い壁」、「白いベッド」、「ゆったりとした白い服」、「長く白い指」といった具合である。ビガーにとって、白色は落ち着かない、不安にさせられる色として描かれている。一例を挙げたい。偶発的にメアリを殺害してしまったビガーは彼女を炉まで運ぶが、そのときに白猫に見られてしまうときの描写である。”A noise made him whirl; two green burning pools—pools of accusation and guilt—stared at him from a white blur that sat perched upon the edge of the trunk. His mouth opened in a silent scream and his body became hotly paralyzed. It was the white cat and its round green eyes gazed past him at the white face hanging limply from the fiery furnace door”. (pp. 131-132)

ここはビガーが最も恐怖を覚える場面として描かれているように思う。ドールトン家が黒人の味方であるとは言っても、彼らは黒人ではない。ビガーは彼らを、そして白人の世界に足を踏み入れた自分を自分でどのように位置づけていいかわからない。自分が黒人の側の人間なのか、それとも白人の側の人間なのか、当惑する。白人の規定した世界の中で、苦しみながら日常を送るしかなかった。

ちなみに、本書の第１章において、white(126), black(55), red(27), blue(6), yellow(8), brown(2), green(8), gold(2), gray(1), pink(1) が使われている（数字は出現回数）。一つひとつの色彩語に何らかの意味が隠されている。

国際文化交流学部 岡村徹先生 推薦図書　パート５

タイトル；　『バウンティ号の反乱』

著者；　ブライアン・フリーマントル

　皆さんは、「バウンティ号の反乱」という歴史的大事件をご存知だろうか。英国史を語るうえで、決して見逃すことができない事件である。本事件は、多くの書籍で語り継がれ、映画化もされている。

　1789 年４月、英国艦船バウンティ号は、パンノキを移植するため、タヒチから西インド諸島の植民地へ向かっていた。かねてからブライ艦長に反感をもっていた、フレッチャー・クリスチャンが自分に賛同する者を集めて、艦上で、反乱を起こした。ブライ艦長以下 18 名を海上漂流に追いやり、船に残った連中は当時無人島であった、ピトアケン島に漂着した。そこで彼らは数奇な運命をたどることになる。

　絶海の孤島で、英国人とタヒチ人の共同生活が始まる。食料を確保するため、鳥の卵を採取する際、崖から転落したものもいれば、異性の奪い合いで殺人も起きた。最後はジョン・アダムズが所持していた聖書による宗教教育によって、ようやく平和が訪れるというものである。

フリーマントル氏は、史実の謎を検証し、極限状態に陥った人間の心理をいききと描いている。本作品はどこか、サスペンス風でもあり、人物描写に優れていて、小説でありながら、まるで映像を見ているような感覚を覚える。フリーマントル氏は、新聞記者やジャーナリストとしての経験もあり、そのため世界 30 か国前後の国に滞在している。それぞれの滞在先で、彼が接する人物の性格をいち早く見抜けなければ、生きてはいけない世界だったのかもしれない。

1999 年に発覚した、「ピトケアン諸島少女性的暴行事件」は、イギリスの法律では罰則対象となり、ポリネシアの伝統文化では許容される。まだ、数奇な運命の続きを見ているようでもある。フリーマントル氏なら何を語るだろうか。

また同じく、バウンティ号の反逆者らの子孫が暮らす、豪州の海外領であるノーフォーク諸島では、バウンティ号の反乱という歴史的事件を観光の目玉にして、収入を得ている。これまで度々、島の独立問題が持ち上がってきたが、そのたびに、豪州はそれを認めてこなかった。そのときに、島民が口にするのは、「エリザベス女王が私たちにこの島をくれた」である。最近では、NZ との接近をはかり、豪州を牽制することもある。こちらも、数奇な運命が続いているようである。フリーマントル氏なら何を語るだろうか。

国際文化交流学部 岡村徹先生 推薦図書　パート6

タイトル；　*Shipwrecks and Seafarers' Scandals: True Tales from Colonial Queensland and the South Pacific*

著者；　Tony Matthews

本書は豪州の歴史に焦点を当てている。特に植民地時代のグイーンズランドと南太平洋諸島民（Australian South Sea Islanders）の関係について詳述している。具体的には、19 世紀にニュー・ヘブリディーズ諸島（現バヌアツ共和国）やソロモン諸島で行われた奴隷狩り（Blackbirding）から、その契約労働者の受け入れの終焉に至るまでが真実を伝える書として描かれている。

Matthews 氏の本には、諸島民や先住民、さらには日本人を含むアジア系労働者が実際に働いた、都市の地図やスケッチ等がたくさん含まれているので、読者は想像をしやすいだろう。クイーンズランド植民地は、南太平洋諸島民を、金のかからない砂糖黍農園の働き手として重宝されたのである。著者も述べているように、初期の段階では“奴隷狩り”という言葉が示すように強制性があった。しかしその後、契約期間終了後、島に戻ると村での地位が上昇したため、今度は自ら志願して、クイーンズランドに向かう者も現れた。両者の思惑が一致したわけである。

ところで、Mattews 氏は、本書のどこにもカナカ（Kanaka）という言葉を用いていない。Kanaka は、ポリネシア語で“動物”を意味するので、それが人に対して使われる場合、侮蔑的な意味となる。

私が 2000 年にクイーンランド州を旅行しているとき、Australian South Sea Islanders という英語をよく耳にした。これは、Kanaka という言葉にマイナスの意味合いが含まれているため、それを払拭する意図があったようである。その言葉の使い手は、主として行政機関であった。しかし、Kanaka という言葉に自信と誇りを持っている人たちもいる。実際私は、We are Kanakas という英語を、彼らからよく聞いた。第一、Australian South Sea Islanders と言ったところで、人びとの彼らへの差別的な意識がそうそう簡単に変わるものではない。カナカの人たちは、豪州の先住民アボリジニ以上に差別を受けてきたとされている。

そもそも彼らは、1901 年の連邦法によって、皆島に戻っているとされているので、長らく豪州の人口統計に含まれなかった。今再び、カナカの人々の豪州の砂糖業への貢献を正しく評価すべきとの声も聞かれるようになったが、Australian South Sea Islanders という表現は、言葉のすり替えにすぎないと思う。長年、就職や結婚や教育において、彼らが受けて来た差別がいかに厳しいものであったか、それは今も続いている。